

乳幼児期の移行対象が青年期の自己愛傾向に及ぼす影響(臨床心理学専攻, 修士論文要旨(2005年度修了者))

阿部, 哲郎

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

281

(終了ページ / End Page)

282

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020751>

<福祉社会専攻>

『介護福祉職の独自性を活かしたケア・アセスメント用紙(案)の開発』

山本 章

介護福祉職の独自性を反映できる「ケア・アセスメント用紙(案)」を開発することを目的とし、1. 介護福祉職独自のアセスメント用紙の必要性及び使用の実態、2. 介護福祉職のための「ケア・アセスメント用紙(案)」の作成、3. 介護福祉職のための「ケア・アセスメント用紙(案)」の有効性についての具体的な目的で実施した。

1. 介護福祉職独自のアセスメント用紙の必要性及び使用の実態

「必要性」については19名のうち18名(94.7%)の人が必要とし、「有無」については、19名のうち17名(89.5%)が無いと回答をしていた。アセスメント方法の現状については、約9割が主にケアマネージャーの情報を用い、独自のアセスメント実施は約1割であった。

2. 介護福祉職のための「ケア・アセスメント用紙(案)」の作成

- 1) アセスメント用紙の内容・項目の決定は、資料・文献および介護の実践場面の調査から収集した。その結果、ADLの8つの動作群【食事動作】【排泄動作】【入浴動作】【整容動作】【更衣動作】【起居動作】【移動・移乗動作】【コミュニケーション】を基本とすること、及び、介護実践場面における独自のアセスメント視点を盛り込む必要があることが明らかになった。
- 2) 作成したアセスメント用紙(案)は、動作群ごとにまとめたシートと、介護実践上必要な医学・生活・意識等に関わる状況を見る【全体状況】の合計9枚を作成した。
- 3) 介護福祉職の独自性から見たアセスメント内容の特徴としては、介護福祉職の特性である生活実践の場で求められる独自の内容があり、それは、生活の流れの中で不可欠な要素であることから、独自の技法として強調されるべきものとして採用した。
- 4) アセスメント用紙に採用した介護福祉職に必要な独自の視点としては、A介護の場所、B介護に必要な準備作業、C介護技法に必要な使用器具等、D介護技法提供時の本人の姿、E本人の主体性・精神心理面に関わる配慮や特性、F「準備・動作・後片付け」の自立度、G動作・行為分析から得られた細項目の自立度、H「必要な部分介助」を明記、Iその動作の介助の時間帯や習慣、Jその動作、行為上の着眼点、K日内変動、日差変動の有無、L声掛けやその他の特記事項の記載欄を多く設置、12項目である。
- 5) 「ケア・アセスメント用紙(試案)」を用いた一次調査を12名の介護福祉職において実施。その結果、11名は肯定的評価であった。一方、問題点や改善点は「項目が多く見づらいため、まとめや整理が必要」、<自由記載を増やした方がよい>等10項目の修正案が出された。また、各動作別のアセスメントについても追加修正意見が出された。
- 6) 一次調査の結果を受けて、9種のアセスメント用紙の追加修正、整理を行い、「ケア・アセスメント用紙(案)」を作成した。

3. 介護福祉職のための「ケア・アセスメント用紙(案)」の有効性

- 1) 介護福祉職3名を対象にした予備調査の結果、追加修正意見が出なかったために、「ケア・アセスメント用紙(案)」を完成とし、これを用いて、二次調査を実施した。
- 2) 30名の介護福祉職員に「ケア・アセスメント用紙(案)」を試用してもらった結果、24名(80.0%)が介護実践現場で役立つと回答していた。
- 3) 役立つと回答した24名の介護福祉職員より出された活用の可能性は、多い順から、<ケアプランの立案>100.0%、<新人及び新しい担当者への引継ぎ>95.8%、<介護問題(課題)の明確化>95.8%、<自らの介護技法の確認>95.8%、<自立支援の視点の明確化>95.8%、<細部に亘るケア技術のポイント確認>91.7%、<利用者に適合した留意点の把握>91.7%、<介護の研究的視点>91.7%、<臨床実践現場におけるミスの減少>87.5%、<ケア技術の効果判定>79.2%、<利用者の生活姿勢(主体的・自立志向性・依存的)の変化の把握>75.0%、<状態の変化への素早い適切な対応>75.0%、<仕事の効率性>75.0%、の13項目であった。一方、介護福祉職員の活用の可能性の否定等意見として、重複回答で、「分かりにくい」、「評価用紙の不備」の意見が4人、「記録・評価に時間がかかる、ゆとりがない」が7人であった。
- 4) 介護福祉職30名より、記入された自由記述式回答を整理した結果、22項目[良いとする点12項目、問題点・追加修正・改善点10項目]の内容に纏められた。

<臨床心理学専攻>

『乳幼児期の移行対象が青年期の自己愛傾向に及ぼす影響』

阿部 哲郎

【問題と目的】

移行対象とは、Winnicott, D.W. (1953) が用いた言葉で、乳幼児が肌身離さず持ち歩き、特別な愛着を寄せる「自分でない」所有物(毛布やぬいぐるみ等)を指す。また、Winnicottは、移行対象はほど良い母親が存在する上で発現すると主張した。

浅川ら(2002)は、母親から理由もなく避けられることからくる不安を感じることなく育った男子青年は、自己愛傾向が高くなると述べている。宮下(1991)は、女子学生の場合、母親の暖かい受容的態度が自己愛傾向を抑制し、否定的な養育態度は自己愛傾向を増長させると報告している。そして、Barkin, L. (1978)は、移行対象が自己愛から抜け出すことを助ける機能を持っていると述べている。

本研究では、「乳幼児期の移行対象が青年期の自己愛傾向に及ぼす影響」について検討することを目的とする。そこで、移行対象の認識を、先行研究で特に重要であるとされた、「移行対象の認知」と「移行対象の記憶」とに分け、移行対象を所持していたことの認識の違いによって、自己愛傾向への影響に差異が生じるのかを見ていく。そして、移行対象を所持しなかった場合には、遠藤(1989)が主張した移行対象が発現しない2要因、すなわち、乳幼児が成長しても母子関係が濃密で、分離

不安・抑うつ不安を感じる事が少なかったため、移行対象を必要としなかった場合（濃密群）と、そもそもほど良い母子関係が存在しなかった場合（希薄群）の2つに分類して検討する。さらに、移行対象に選ばれた所有物のタイプ（1次的移行対象・2次的移行対象）の違いと自己愛傾向との関連、移行対象の放棄方法と自己愛傾向との関連について明らかにすることも併せて目的とする。

加えて、自己愛傾向を測定するにあたって使用する自己愛パーソナリティ目録（Narcissistic Personality Inventory：NPI）の因子分析を行い、新たに因子を抽出することも目的とした。それから、性別と自己愛傾向に関しては、有意な性差を報告している研究結果（浅川ら、2002；佐方、1986）もあるが、有意な性差が見出されなかった研究もある（大石、1989）。それらを踏まえ、本研究においては性差が見られるかどうか検討する。

【方法】

調査対象者は、東京都内の大学に通う大学生182名で、有効回答はその内の173名（男性51名、女性122名）から得られた。質問紙は、（1）就学前の母子関係尺度（酒井、2001）、（2）移行対象に関する質問、（3）NPI（佐方、1986）を用いた。

【結果と考察】

NPIの因子分析の結果、「優越性・指導性・対人影響力」、「自己顕示・自己耽溺」、「利己性」の3因子が抽出された。また、本研究の結果によれば、NPI得点には一貫して有意な性差が認められ、いずれも男性の得点が女性の得点を上回っていた。自己愛傾向に関する性差について、浅川ら（2002）が、NPIの内容が藤森ら（1992）のいう社会的に求められている青年期の男性役割と類似した内容であることから、男性が相対的に高得点を示したと述べていて、そのことが本研究の結果にも関連しているものと思われる。

そして、移行対象の認識の2分類とNPIの下位尺度において、関連が認められたのは移行対象の認知（全サンプル）における利己性のみであった。この結果により、移行対象の記憶の有無よりも移行対象の認知の有無の方がより重要であることが示された。さらに、移行対象がありそれを認知している者は、就学前の母子関係が濃密で移行対象を持たなかった者よりも、青年期において利己性傾向が低い傾向が見られた。このことは、移行対象が必要ない程に母子関係が濃密である場合には、母親は子どもの要求を常に満たしてくれ、子どもによっては本来ならば幼児期に脱却すべき万能感から十分に抜け出せずに成長するかもしれない、それによって、利己性・自己中心性が持続し、青年期において利己性傾向が高くなることを示唆していると考えられる。加えて、本研究では、移行対象のタイプ／放棄方法と自己愛傾向には関連が認められなかった。

それから、本研究は回顧的研究であるため、その研究内容の質には自ずと限界が存在する。したがって、今後は乳幼児の直接観察、養育者等へのインタビュー、及び追跡調査などが有効であると思われる。また、本研究ではサンプル数が少なく、男女のサンプル数の偏り（女性のサンプル数が圧倒的に多かった）もあったため、今後は全体的にサンプル数を増やし、男女のサンプル数も極力均等になるようにして調査を実施することが必要であろう。総じて、本研究によって得られた結果は興味深いものであったが、考察を行うにあたっては、まだまだ関連する先行研究が少なく、推測の域を脱していないため、今後のさらなる研究が求められる。

<臨床心理学専攻>

集団コラージュにおけるコラージュ表現の系列的变化

石井知香

個人を対象にした精神療法として誕生したコラージュ療法であるが、近年臨床の場のみならず、医療・看護・福祉・司法・教育・産業などの様々な分野で、グループを対象にして、グループワークやコミュニケーションの手がかり、自己啓発技法として用いられ、様々な効果の可能性や能力開発に効果的であるということが報告されている。

本来コラージュ療法は、面接場面の中で、クライアントがうまく表現できないこと、うまく言葉にならないことを理解するためにコラージュを導入するのであるのに、今までの集団コラージュ研究では、コラージュ療法本来の持ち味である作品の系列的变化やグループ力動が流れる中で個人の、そしてグループの変化については未だ研究がされていない。

そのため本研究では、エンカウンター・グループ・プロセス理論（野島1982）を取り入れ、10回のコラージュ制作とシェアリングを行い、その中で起きた個人の変化や集団力動が流れる中ででの集団の形成について研究を行った。

今回の研究では、9人で構成された1グループを対象にコラージュ制作と、次に作品を見せながら、自分の作品を発表し、その後自由に話し合うシェアリングを1セッションとして10回、半年間に亘り繰り返し行った。さらに、作品およびシェアリング以外での定量的な変化を捉えるために、1回の制作ごとに性格検査を行った。そして10回の作品終了後、それまでの作品を制作者の手元に返却し、半年間の振り返りをグループ場面で1回と個別面接をメンバー一人に対し1回行った。

その結果、集団コラージュを同じグループに対して継続的に行うことにより、グループ力動は、エンカウンター・グループ・プロセスと似た軌跡をたどることが明らかになった。10回の制作の中で個人は、台紙を通して言葉にはなりにくいことや、頭の中だけで考えていたことが、作品にすることで視覚を使って初めてはっきりと見えてくる。そしてその思いを他者に対して語るという過程を通して、今まで見えていなかった自分の姿が見えてきて、参加者それぞれの形で変化していった。さらにその変化の中には、他者からの影響を受け、また他者にも同じく影響を与えながら変化する様子も明らかになった。また同時に、他者のコラージュを繰り返し見ることによって、他者を理解するという役目も担っており、それらの要素が絡み合いながら、グループ力動も動き出すという、過程が見出された。

作品を作ることで自分に気づき、成長するということはあるが、さらに、人に「見せる」「説明する」という他者とのコミュニケーションの道具としてコラージュを使うことは有益であり、その役割は非常に大きいことがわかった。

加えて、現物がそのまま残るということで、作者自身が、初回からの自分の成長過程を見つめ返し、自己理解を深めることができる。これは言葉のみのやり取りや、箱庭療法からは得られない特長である。今までの作品を始めから見直すことは、1回限りのコラージュでは得られない、達成感や満足感が得られることが確認できた。